

吉田絃二郎童話に見られるキリスト教からの影響に関する研究 －「天までとどけ」を中心に－

A Study on the Influence from Christianity seen in Fairy Tales
by Genjiro Yoshida

－Focusing on “Ten Made Todoke”(Deliver to Heaven)－

中 島 賢 介

要旨

吉田絃二郎(1886 - 1956)は、感想集『小鳥の来る日』をはじめ数多くの話題作を発表し流行作家となった。今回は大正時代を代表する児童雑誌『赤い鳥』に収録されている「天までとどけ」を中心に、作品内容にみられるキリスト教からの影響を考察する。絃二郎は長崎の東山学院でキリスト教に出会い洗礼を受け、やがて信仰生活からは遠ざかるものの、作品の至る所で聖書からの影響を受容し続けたことが分かった。今回取り上げる「天までとどけ」においても、旧新約聖書からの影響を受けていることが分かった。

キーワード：児童文学(Children's Literature)／キリスト教(Christianity)／吉田絃二郎(Genjiro Yoshida)

I はじめに

大正期から昭和初期にかけて隆盛を誇った児童雑誌『赤い鳥』には、多くの作家たちが主宰者鈴木三重吉に賛同して児童文学作品を提供してきた。今回は、当時早稲田大学にて英語英文学の講師を務め、旺盛な作家活動を続けながら童話も提供していた吉田絃二郎(1886-1956)を取り上げる。絃二郎は、後に早稲田大学教授となり、職を辞してから小説の他、戯曲や随筆など幅広い創作活動に従事している。その業績は折あるごとに『吉田絃二郎全集』、『吉田絃二郎童話全集』、『吉田絃二郎選集』、『吉田絃二郎感想選集』などにまとめられて出版されていることから、児童から成人まで幅広い読者を得ていることが分かる。『赤い鳥』には、一部の中編を除き短編を提供しており、その数は33作品に及ぶ。今回は、これらの作品から、代表作の一つである『天までとどけ』を中心に、キリスト教文学研究の見地から絃二郎が持つ宗教

性がどのように反映されているかについて考察する。

II 吉田絃二郎の略歴

絃二郎の作家論作品論としては、原岡(1993)の研究が代表的である。原岡は、絃二郎の生涯を「生い立ちと故郷佐賀時代」「佐世保時代からミッションスクールへ」「佐賀工業時代」「上京・苦学時代」「志願兵としての対馬時代」「早稲田大学時代」「『六合雑誌』時代から文壇へ」「人気作家、吉田絃二郎」と章立てて論じている。

まず出生についてであるが、年譜には1886(明治19)年と記載されているが、戸籍には1884(明治17)年生と記載されている。佐賀県神埼郡神埼町に父栄作、母リフの次男として生まれた。実家は酒造業を営んでいたが事業が失敗し生活が困窮していた。幼児期に一家は佐世保に転居したこともあり、絃二郎は高等小学校までを佐世保で暮らしている。

しかし、小学校時代に偶然入った教会に導かれ、高等小学校卒業後は長崎のミッションスクールで

ある東山学院に入学し在学時に洗礼を受ける。だが、両親の反対に遭い翌年東山学院を退学し、佐賀工業学校に入学して三年間を佐賀で過ごす。その後上京し早稲田大学予科に進学、翌年早稲田大学英文科に入学する。在学時に志願兵、見習士官として対馬の砲兵隊に所属し、計2年間の軍隊生活を経験する。復学後、加能作次郎らと同級となり、交友関係を結ぶ。卒業後、キリスト教雑誌『六合雑誌』の編集に携わり、創作活動を始める。その後雑誌編集を辞めて1915(大正4)年早稲田大学の講師となり英語や英文学を講じながら創作活動を進める。教授となってからも各誌に作品を寄せ1934(昭和9)年退職後も旺盛な活動が晩年まで続く。1937(昭和12)年明枝夫人が死去、1946(昭和21)年には神経痛を患い、1951(昭和26)年にはパーキンソン病を診断され、1956(昭和31)年死去する間際まで作品を執筆していたが、その一か月後脳出血が原因で永眠する。

Ⅲ 絃二郎の信仰歴

信仰歴として注目すべき点としては、東山学院での受洗である。原岡は、「ここで受けたキリスト教の感化は一生を大きく支配した」と述べている。『日本のキリスト教児童文学』には、著名な作家がいつどのような形でキリスト者になったが紹介されている。冨田(1995)は作家たちが受洗した年齢に着目し、「受洗の年齢からも充分にうかがえるが、ほとんどの作家たちが、幼少年、青年期の感受性の豊かな時期に、キリスト教の説く宗教的な思想、感情に触れ、導かれて、人間を形成した人たちだといってよいだろう」と述べている。確かに絃二郎も東山学院で受洗したのは15歳の時である。全寮制でキリスト教に基づいた教育が行われていた学校で暮らすうちに自らも信仰を告白するに至ったと考えられる。両親の反対に加え、造船にも興味を持ったという理由から佐賀工業学校に入学するが、実際は文学への傾倒が著しく上京することになる。原岡は、その経緯をこう述べている。

「ミッションスクール東山学院で半年程もしたであろうか。絃二郎はとうとう父から連れ戻されることになったのである。又、キリストチャンになったことを強く反対していた父で

もあった。

『そんなに勉強したいのなら、暇だけはやろう』ということで、郷里佐賀工業学校へ入学することを許してくれたのであった。」

(下は論者)

この経緯を見る限り、父親に信仰生活を送ることについて反対され、工業学校での生活においては信仰から距離を置いていたと考えることができる。しかし、その後早稲田の予科時代には教会に通った形跡もあり、対馬では毎週日曜日にキリスト者家庭への訪問をも行っていた。こうした信仰歴が結果として『六合雑誌』への就職にもつながっていると考えられる。

だが、「早稲田文学」に「副牧師」という作品を発表した際、警保局からその内容が不適切だと指摘され発売禁止となる。原岡の年譜稿には「宗教方面に関係ある人々より種々の批評攻撃を加えられる」と記されている。また、絃二郎自身、小説『大地の涯』を発表した際、キリスト者たちから痛烈な批判を受けたことを述懐している。

「去年『大地の涯』を書いた時であった。私は一部のキリスト教の人たちから手きびしい非難を受けた。「人の魂を傷けるお前は人のものを盗んだのよりも罪が重い」といふやうな、私に對する言葉まで浴びせかけられた。無論その言葉のうらには「あはれな不信者だ」といふやうな、私に對するキリスト教徒的な同情も加はつてゐたやうである。(略)

私も過去の或る時期に於いてはクリスチャンであつた。高い雪の山に登つて、雪に降られながら地にひざまづいて祈つたこともあつた。しかしその時だつて私はクリスチャンといふ名にはふさはしくなかつた。私は餘に悪魔的な熱情に燃えてゐる人間であつた。

(下線は論者)

岡は絃二郎作品の中には、「深刻なる男女の愛情をくりかえして、作品を描いているという事実が、わたくしに絃二郎その人の結婚生活を思わせずにおかない」ものがあるという。その根拠として、木下空太郎が「『実』らしいものの影が見える」という評や、身辺小説に登場する主人公の女性たちが絃二郎の妻の投影があると考えられるという考察を挙げている。こうして自然主義文学か

ら出発したこれらの作品が生活の煩わしさを招き、そこから逃れるように「抒情的な気分」で書いた『島の秋』が成功し、作風に変化をもたらしたとしている。岡の考察にも見られるように、絃次郎は若かりし頃、信仰を告白しキリスト者にはなったものの、内面からみなぎる熱情はキリスト者の殻を割り、信仰を解放させたということが考えられる。特に早稲田大学の講師になってからは、キリスト者や教会に対して批判の眼を持ち、その代り仏教への興味関心が高くなっていく。絃二郎を躓かせた原因は何だったのか。それは、彼の著作から推察することができる。

まずは、キリスト者の問題である。随筆「ナザレの貧兒」には次のような記述がある。

「私はキリスト教の人々に出逢つて失望させられたこともあつた。けれども眞實に美しい心の人を見出すこともあつた。(略)

日本のキリスト教は卑俗な外國傳道者を放逐した後でなければ生まれぬ。

日本のために働いて呉れた崇高な人格の外國傳道者を忘れることはできないが、同時に下等な渡り者の傳道者を呪はなければならぬ。」

次に、教会及び教会制度の問題である。エッセイ「草の上の學校・宗教・藝術」には、次のような記述がある。

「いつもほんたうな宗教は枕するところをすら持たぬ野の人、路傍の人たちから生まれて来る。黄金の丸屋根を延べたチャペルが出来たころはキリストの教は死んでゐた。(略)

一度屋根の下にはいつてしまふと怠け者になつてしまつて、悪賢い智慧を働かせて、體を骨折らせないことを工夫する。教會から屋根と壁を取り除いてしまはなければ、ほんたうな宗教は生れては来ない。」

以上のことから、一過性の熱情とキリスト者や教会制度に対する不満が彼を教会から遠ざけ一定の距離を保たせたということが出来る。

この距離感について、原岡が主張する「クリスチャンから仏教徒に改宗し」篤信家となつていったと断言する考え方がある一方、キリストと釈迦とを同列に描いていることから、キリスト教を棄てたのではなく距離を置いたのだという考え方も

できる。いずれにせよ、少なくとも東山学院で得られた信仰生活は生涯を通して継続されることがなかったということは事実であるといえる。

IV 絃二郎の人物評

早稲田大学時代同期生で同じく教授を目指していた加能作次郎は絃二郎の印象を「地味で謙遜で、術学的なところや軽薄なところの微塵もない懐しみの深い善い人だった」と述べている。早稲田にて絃二郎の講義を受けた井伏鱒二は「吉田先生の講義は感傷的で且つ情熱的なのである」と人気講師ぶりを伝えている。文壇では、「人道的な愛の作家であると同時に、宗教的な思索者とも見られ、田園詩人とも受け取られ」ている。こうした絃二郎の人物評については、先述した原岡、池上(1987)、岡(1971)などがすでに論じている。原岡は地元の著名作家という視点から、池上は児童文学作家という視点から、そして岡は梅本育子の『時雨のあと』に描かれている晩年の絃二郎像を浮き彫りにしている。岡は、「読者のうち、かつていくらかでも絃二郎の作品にふれたことのある人びとは、おそらくショックな感慨をおさえがたかつたのではなからうか」と指摘しているのは、それまでには数々の童話で当時の少年少女を、そして随筆では自然と人生を見事に謳い上げ若者を魅了してきたというある種確固たる人物評があつたからである。『時雨のあと』は絃二郎が妻を亡くした後、女中を愛人として家に入れ、さらには養女としてしまうなどの内容が描かれている。これがかつての絃二郎像をいわば「面皮を剥いだ」のではないかと述べている。

しかし、岡はまた、絃二郎が「ホトトギス」に発表した「蜥蜴」や早稲田文学に発表した「副牧師」を取り上げ、男女における関係のもつれなどが生々しく描かれていることをも指摘している。特に、先述した通り、「副牧師」には性描写が施されていることもあり、警保局から卑猥であるという理由で発売禁止となつた。絃二郎は、一般成人を対象にした小説にはこうした内容を発表してきているので、そもそも先述した人物像は当てはまらない。絃二郎は童話においてそうした指向は一切ないとはいえ、小説では全く別のモチーフで創作しているため、そもそも固定化した人物評自

体に問題があるといえる。

V 『赤い鳥』における子ども観

絃二郎の童話については、『赤い鳥』に作品が発表される1921(大正10)年以前には『日本少年』、『少女の友』、『こども雑誌』、『少年男生』、『少女画報』、『金の船』、『童話』などの児童雑誌に発表されている。『赤い鳥』には、1921(大正10)年11月号に掲載された「黒ん坊、白ん坊」を皮切りに33編が発表されている。河原(1998)は、『赤い鳥』に登場する子どもの基本イメージについて3種類挙げている。

- ① 良い子 他人に優しい、親孝行、努力家
自分の行為を反省する子ども
- ② 弱い子 くよくよ悩む、病氣、貧乏
虐待されている子ども

③ 純粋な子 非功利、非妥協、無垢な子ども

①について『少年倶楽部』では立身出世・英雄主義的な色彩が濃く、『赤い鳥』では相手の立場を尊重して優しくする子ども像が見られる。

②について外的要因内的要因により自己の存在が危うくなっているような子ども像が見られる。

③について、ここでいう純粋な子というのは、人間同士の利害関係や打算の成立しない間柄である。河原は、特に②と③の項で絃二郎の童話を紹介している。具体的には、②について「お銀のうた」や「壺作りの柿丸」などの感傷性は登場する子どもの弱さによるものだとしている。特に「天までとどけ」は、主人公弥一は①から③のすべてを併せ持つ子どもであるとしている。

VI 童話「天までとどけ」

以前、論者は同じ早稲田文学の仲間作家の加能作次郎が書いた童話『少年と海』に関する小論の中で、明治から昭和初期まで型の大小関係なく津波や嵐で遭難する船が後を絶たなかったということを述べた。この「天までとどけ」についても同様で、あらすじは以下の通りである。場面は少年弥一の父が海難事故に遭ったという話から始まる。弥一は父親が港に戻って来られるように自分が住んでいる小屋の板を一枚一枚剥がしながら毎夜明かりを灯し続けていた。しかし、いくら待っても父の船は帰らず、村人からも諦めるよう諭さ

れるが、それでも小屋の板を剥がしては火を焚き続けていた。そのうち、小屋の板がなくなり途方に暮れていた所に子どもたちが難破船の板を燃やしたらどうだと提案し、皆で火を焚いた。その姿を望遠鏡越しに眺めていた外航船の士官は、「火の柱のようにきよい火だ」と言うと、船長は「火の柱をめぐって、たくさん子どもたちがおどっているぞ。これはすてきだ。まるで神さまの世界のようだ」と感心して眺めていた。その外国船に乗船していた一人の日本人が甲板に上がって来て自分の故郷だという。その日本人こそ、弥一の父であった。船は港に近付いて錨を下し、ボートで父親を弥一に合わせるために接岸する。そして再開した父子は抱き合い、まっかな火の柱が幸福な父子を照らした。そして、外国船の乗組員たちは子どもたちと一緒に踊りだした。

この物語に登場する「火の柱」は、旧約聖書出エジプト記13章17節から22節までの「火の柱、雲の柱」をモチーフにしたものと考えられる。神が預言者モーセが率いるイスラエルの民をエジプトから脱出させた際、昼には雲の柱を、夜には火の柱をもって導いたという箇所である。この柱のおかげで、民らは昼も夜も行進をすることができた。弥一が父親のために、そして港を通る船のために燃やし続けた火を聖書の火の柱と見立てたと考えられる。また、ランプの明かりや板で火を焚く場面については、火が「きよいほのお」と表現されていることから、「あなたの御言葉は、わたしの道の光 わたしの歩みを照らす光」(詩編119編105節)、「あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである」(マタイによる福音書5章16節)などの聖句を想起させる。

弥一は必死になって自分の住まいを犠牲にしてまでも父親の帰りだけをただひたすら待ち続けている。その姿を村の人々は、「ちゃん(論者注：父親)が帰らぬので気がくるうたのじゃなあ、かわいそうに。うちをこわしてるぞ。いまに雨でもふったらどこに寝るつもりだんべえ」と憐憫を持ってそれをやめさせようとする。その一方、村の子どもたちは、弥一の姿に同情しながらも何とか弥一の心に寄り添い、難破船の板を明かりに使用

することを提案し、一緒になって火の回りを踊り出す。大人と子どもの姿や態度、会話などを対照的に表現することで、「童心」を見事に浮き出させているといえる。

上総は、『日本キリスト教児童文学全集2巻』のあとがきで、絃二郎の童話をこう評価している。

「吉田絃二郎のは、少し物語性を狙いすぎた観があるように思いますが、一つの柚子をめぐる寓話、木こりの爺さんの善意の表出、弥一少年の自己犠牲に近い焚火の話に、作意を超える善意や祈りをくみとることができますし、そうした読み方、あえて言えば善意にみちた読み方が、いちばん望ましいものなのかもしれません。」

この善意に満ちた読み方とは、想像力を膨らませながら書かれていない部分も含めてじっくりと時間をかけて楽しむ読み方のことである。「天までとどけ」であれば、弥一親子が毎日どのような暮らしをしていたのか、弥一はどのような気持ちで父親の帰りを待っていたのか、子どもたちは火の周りでどんな踊りを踊っていたのか、情景や行間を味わいながら父親との再会を喜んでほしいといったところであろう。

「作意を超える善意と祈り」については、ルカによる福音書18章1節から8節までの「気を落とさずに絶えず祈らなければならないこと」であったり、マルコによる福音書11章「祈り求めるものはすべて既に得られたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになる」であったり、聖書の言葉を実践する子どもの姿に信じることの大切さを再認識することであろう。大人からすると小屋の板を燃やすことなど「気がくる」ったと思われるような姿にこそ、弥一の純真無垢でけなげな姿を読み取ることが重要になる。この読み取りがあって初めて最後の踊りの場面を共に喜ぶことができるということが分かった。

Ⅶ おわりに

これまで、絃二郎作品の多くが版を重ねられていることから、読者の共感を呼ぶ、価値ある作品を多く世に出しているということが分かっている。今回は、「天までとどけ」がキリスト教からの影響を強く受けて執筆されているということが

分かった。しかし、その影響が具体的にどう示唆されているかという問題については、絃二郎作品、中でも宗教論をさらに細かく分析していく必要があるだろう。

〈引用文献・参考文献〉

- 安藤勝志 (2001) 「資料 近代文学資料 一吉田絃二郎 一」『経営情報学部論集』(浜松大学)第14巻第2号 p. 352-304
- 池上研司 (1987) 「吉田絃二郎論：『赤い鳥』の『京の寺へ』を中心に」『湘北紀要』第8号 p. 63-72
- 伊藤重行 (2012) 「佐賀出身の吉田絃二郎の思想研究」『産業経営研究所報』(九州産業大学)第44号 p. 21-30
- 岡保生 (1971) 「吉田絃二郎の小説 一 一」『學苑』(昭和女子大学光葉会)第373号 p. 74-79
- 河原和枝 (1998) 『子ども観の近代 『赤い鳥』と『童心』の理想』中公新書
- 紅野敏郎 (2000) 「本・人・出版社13 吉田絃二郎遺稿集『吉田絃二郎句集』」『国文学解釈と鑑賞』第65巻1号 p. 203-206
- 坂本政親 (1991) 『加能作次郎の人と文学』能登印刷出版部
- 島崎藤村・沖野岩三郎・有島武郎・吉田絃二郎・賀川豊彦 (1983) 『日本キリスト教児童文学全集第2巻』教文館
- 鈴木保昭 (1979) 「吉田絃二郎とホイットマン」『武蔵野女子大学紀要』第14号 p. 65-79
- 日本児童文学会・富田博之・上笙一郎編 (1995) 『日本のキリスト教児童文学』国土社
- 原岡秀人 (1993) 『吉田絃二郎の文学・人と作品』近代文藝社
- 原岡秀人 (1973) 「吉田絃二郎『略年譜』・『作品目録』および「生い立ち」に関する問題について」『佐賀龍谷學會紀要』第18・19号 p. 215-262
- 原岡秀人 (1974) 「吉田絃二郎の芭蕉観 芭蕉への関心と撰取態度について」『佐賀龍谷短期大学紀要』第21号 p. 40-48
- 原岡秀人 (1975) 「吉田絃二郎年譜稿」『佐賀龍谷短期大学紀要』第22号 p. 30-48
- 原岡秀人 (1978) 「吉田絃二郎の文学活動について(序説)」『佐賀龍谷短期大学紀要』第24号 p. 57-67
- 原岡秀人 (1983) 「吉田絃二郎作品目録(稿)」『佐賀龍谷短期大学紀要』第29号 p. 207-230

- 原岡秀人(1993)「評伝吉田絃二郎(二) 佐賀工業時代から早稲田大学時代まで」『九州龍谷短期大学紀要』第39号 p.19-43
- 谷沢永一(2001)「本好き人好き(150) 文化主義と社会問題 - 桑木巖翼『文化主義と社会問題』, 吉田絃二郎『麦の丘』」『国文学 解釈と教材の研究』第47巻4号 p.156-159
- 谷沢永一(2001)「本好き人好き(142) 男子禁制 - 野口帰羊『男子禁制』, 吉田絃二郎『心より心へ』」『国文学 解釈と教材の研究』第46巻8号 p.156-159
- 山根龍一(2007)「石川 吉田絃二郎『北陸の旅』」(特集:旅と文学) 国文学第72巻4号 p.121-124
- 吉田絃二郎(1957)『小鳥の来る日』新潮文庫
- 吉田絃二郎(1949)『わが人生と宗教』萬葉出版社
- 吉田絃二郎原作・武井武雄絵・宮脇紀雄再話(1998)『きりたおされた き』(武井武雄絵本美術館) フレーベル館
- 与田準一編(1958)『赤い鳥代表作集』第2巻(中期)第3巻(後期) 小峰書店
- 早稲田文学・市川真人編(2012)『早稲田作家処女作集』講談社文芸文庫